

聖壽寺(盛岡市)所蔵『マリア観音像』(厨子付)の調査報告

—作品の由来・制作年代と南西仏ルルドの「無原罪の御宿り」との関連—

A research report on a little sculpture “Maria-Kannon” owned by Shouju-ji temple in Morioka Iwate (July.2014)

—The provenance, creation-age and relations with the sculptures of Virgin Mary of Lourdes—

安發 和彰 | Kazuaki AWA

福島 茜 | Akane FUKUSHIMA

This is a report on the so-called Maria-Kannon that designated cultural property in Morioka-Shi Iwate-Ken. At 2013~2014, Board of Education of Morioka was takeover the research about its provenance and creation-age and we followed them. The crest on the case and the iconography of the Lady Mary suggest that this was made in Lourdes, the famous holy place of pilgrimage in south-western France. In other words, this small sculpture (bronze) is not a “Maria-Kannon” made in Japan but the “immaculate conception” of Christian doctrines, so-called “Virgin Mary of Lourdes”. However we could not clearly say the creation-age, it should be dated to about late 19th century and was made as one of the souvenirs of the pilgrimages. So it is very important that this Lady Mary from south-western France has kept over a hundred years secretly in Buddhist temple, Shouju-ji, the family temple of Nanbu-clan, from the historical point of view, of the Christian mission and establishment of Christianity in Morioka-Shi.

はじめに 調査開始の経緯と問題点

岩手県盛岡市北山2丁目12-15の大光山聖壽寺に伝わる青銅製小像は、開閉型(上面と側面)の厨子(像本体と同じく青銅製)に納められている¹。これまでは、本寺の伝承等から桃山時代に溯るキリシタンの「マリア観音」とされ、その貴重性から1998年4月10日に盛岡市有形文化財に指定された²。2013年にもりおか歴史文化館(盛岡市)の学芸員による再調査が実施され、そのなかで、注目されてこなかった厨子天蓋に刻印された「しるし」の追跡から、本像の制作および来歴について、重要な問題が明らかになる可能性が示唆された。そこで、指定文化財の管理等を管轄する盛岡市教育委員会歴史文化課が主導して再々調査を行い(2013年6月~2014年3月)、新たな見解に達した。本論はその結果報告である。

1. 資料作品の概要

本像は像高2.4cmと極小で、形状は、正面向きの立像である[図1]。身体部前面3分の2程度までを造形し、背面を平らに成形した本体を、厨子を縦半分に仕切る壁部に接着して納めている。造像は、頭部をやや左上方に傾けて視線を上方に向け、右脚をわずかに後方に引いてゆるやかなコントラポストを示す、優美な姿勢の女性像である。頭部から被るヴェールが両肩を覆い腰までかかり、腰から長い帯を垂らす。胸前で両手を合わせる「祈り」の身振りをとり、右手にカトリックの長いロザリオを下げる。

一方、本像を納める厨子は、高さ3.5cmの円筒形で(底部径2.0cm)、上面に開閉式の天蓋、胴体正面に蝶番留めで前開きの扉が設置されている[図2]。縦半分に仕切られた内部は、後半部が空洞で、現状では、そこに白檀の香を染みこませた白布が納められている。厨子の側面および扉内部壁面の数カ所に、様式化された3弁の花文様が認められ、蓋の上面にはアルファベットのLおよびN[DE]Dからなる装飾的な組み合わせ文字が凸刻されている。前扉と天蓋の内側、本像背面の壁部には、黄金色に輝く金メッキが施される。

本像・厨子ともに、生地部分が黒色化し、表面メッキの一部に磨耗が認められるにしても、厨子の天蓋、前扉の開閉機能は健全で、本像に欠損もなく、全体としての保存状態は非常に良好である。

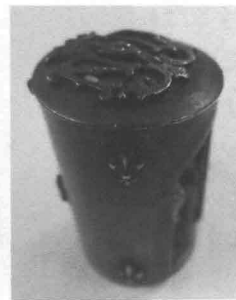
2. 寺伝とこれまでの調査

現所蔵者である大光山聖壽寺は、1613(慶長18)年に青森県三戸から移して開山した臨済宗妙心寺派の寺院である。盛岡藩三戸郡小向村(現在の青森県南部町小向)の福壽山三光庵を前身とし、もとは1361(康安元)年、孤峰覚明こほうかくみょうによる開山と伝えられる。4世涼室宗蔭りょうしつそういん下の1598(慶長3)年に南部氏が居城を盛岡に移した際、三光庵も萬年山正壽寺として盛岡に移転した。その後、5世桂林宗讒けいりんそうしんの時代に(1600年代)盛岡藩第3代藩主南部重直なんぶしげなおの命によって、盛岡城の艮(北東)の方角に当たる現在地に再度移され、城の鎮護の役割を担った。三戸三光庵の時代から、三戸南部、盛岡藩主南部家の菩提寺とされた名利である³[図3]。

本像・厨子とも、今日まで記録文書は確認されていない。口承の寺伝によれば、由来は古く、桃山時代の16世紀にまで溯るとされる。すなわち、盛岡藩第2代藩主南部利直なんぶとしなお(1576~1632年)の正室於武の方が、1594年、輿入れの際に持参した品々のうちの1点であったと言われるのである。この於武の方は、1580年代に洗礼を受けたキリシタン大名、蒲生氏郷がもうじきょう(1556~1595年、洗礼名レオ)の養妹で⁴、これまでの調査で、本作は、氏郷がキリスト教信仰のよりどころとして所持していたのを於武の方に与え、南部家に持ち込まれたと推察されたのだった。それが何らかの契機



〔図1〕 マリア観音像(厨子付)
(2013年 撮影安發)



〔図2〕 厨子
(2013年 撮影安發)



〔図3〕 聖壽寺本堂外観(2013年 撮影福島)

に南部家から聖壽寺にもたらされ、その後の長い禁制時代を寺内に秘匿されて生き延び、仏教の「観世音菩薩」をキリスト教の「聖母マリア」に見立てた「マリア観音像」として、今日にいたったと考えられていた。本寺には、本像の他に『南蛮屏風』(16世紀 現神戸市立博物館)も保存され、聖壽寺とキリスト教との関係を示す証しとなっている。とはいえ、この限りでは、本作の制作や来歴に関して、明確で具体的な証拠や裏付けが示された訳ではなかった。

3. 厨子のしるし

本作の厨子に刻まれた「しるし」については、これまでの調査では、言及があったにしても、詳細に追究されなかった。しかし、この「しるし」こそが、口承とは異なる、厨子および本像の制作地や制作年、制作の目的等を推察する契機となると思われる。

確認できる「しるし」は、2種類の刻印である。厨子側面および像背面の壁部には、デザイン化された花卉型の「しるし」が複数認められる。この意匠は、広く西洋の伝統的な「紋章」のなかで探ると、フランスの「百合花紋 fleur de

lis」と一致する。これは、中世以来、広く使われつづけてきた「フランス王家」の紋章なのである⁵〔図4-1、4-2〕。また一方でキリスト教世界において、「白百合の花」は、初期から聖母マリアの「処女性」のシンボルとされてきた伝統的図像なのでもあった⁶。

本作のもう1種類の「しるし」は、厨子の天蓋の上面に刻まれている。組み合わせ文字で「N[DE]D」と刻まれ、「ND DE」と読むことができる。中央には、左右対称で意匠化された文字「L」が確認できる。この「ND」は、フランス語「Notre-Dame」で、キリスト教世界の「我らの貴婦人」すなわち「聖母マリア」を指すのに違いない。「DE」はフランス語の接続詞「de」。上部の「王冠」は、聖母に関する図像のなかで探れば、聖母が死後に天上で父なる神から授かる冠、つまり聖母の「天の皇后」としてのシンボルと考えられる。

この刻印の「しるし」は、あらためて西洋の伝統的な聖母の標識をたどると、フランス南西部の聖母の聖地ルルド Lourdesの「Hospitalité de Notre-Dame de Lourdes」（ルルドの聖母ボランティア協会）のものとは一致する〔図5-1、5-2〕⁷。すなわち、天蓋に刻まれたこの飾り文字「L」は、「Lourdes（＝ルルド）」の頭文字なのであり、全体で Notre-Dame de Lourdesを示しているのである⁸。



〔図4-1〕 厨子内側のしるし (2013年 撮影安發)



〔図4-2〕 fleur de lisの描き起こし (作成福島)



〔図5-1〕 厨子上面の刻印 (2013年 撮影安發)

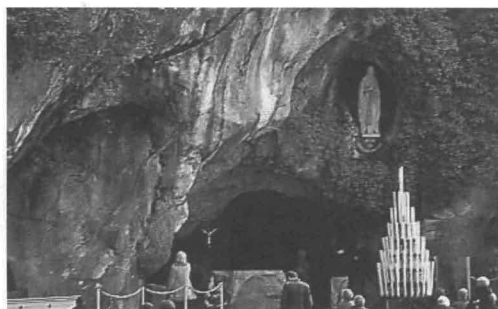


〔図5-2〕 「ルルドの聖母ボランティア協会」の標章

そのルルドは、フランス南西部でもスペインとの境沿いのピレネー山脈にかかる小村で、19世紀後半以来、聖母出現の聖地とされ、聖母自身が指し示したとされる泉の湧く「マサビエルの洞窟」に聖母像を置き、儀式の場としてい。その泉水には病氣や怪我、身体的障害等を治癒する力があると信じられ、聖地で恩恵に与ろうとする巡礼者は、19世紀以来現在に至るまで、ひきもきらず夥しい数にのぼっている。ルルドの聖母ボランティア協会は、1885年に創設。カトリックのタルプ司教の下で組織化が整えられ、ルルドにおける巡礼者の世話や泉水にひたる行為の援助に携わるものである。⁹〔図6、7、8〕



〔図6〕 フランス地図 (福島作成)



〔図7〕 ルルド マサビエル洞窟の「無原罪の御宿り」 (2007年 撮影安發)



〔図8〕 ルルド 聖地概観 (2007年 撮影安發)

4. 本像のイコノグラフィと 「ルルドの無原罪の御宿り」

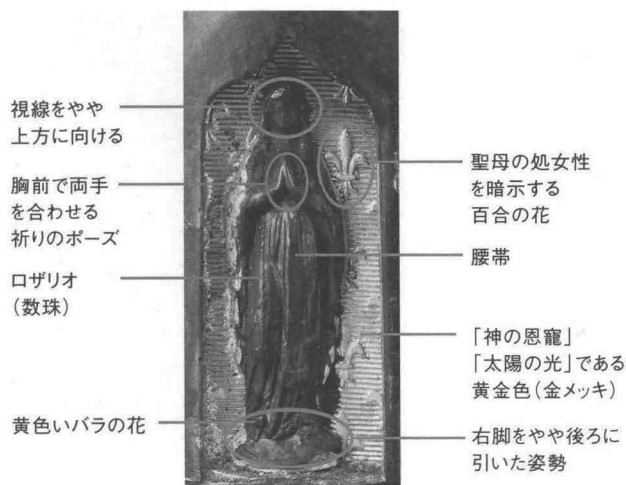
以上刻印された「しるし」を検討するなかで、本作とフランスとの繋がりが見えてきた。以下では聖壽寺の本像のイコノグラフィ、すなわち造像(図像)の特徴を見分け、ルルドの聖母像も含め、西洋の伝統的図像と比較しながら、本像の意味と由来について検討する。

あらためて見れば、本像の造像は以下の7点を特徴としている[図9参照]。

- ① 正面向きの立像。右脚を後方に引いて膝を曲げ、わずかにコントラポストを示す姿勢。
- ② 頭部がやや上向き。視線を左上方に送る。
- ③ 胸の前で両手を合わせた「祈り」のポーズ。
- ④ 頭から腰まで垂下するヴェールと腰から垂らした「腰帯」。
- ⑤ カトリックのロザリオ(祈りの回数を数えるための数珠)を右手から下げる。
- ⑥ 背地(バック)が金メッキで黄金色に輝く。
- ⑦ 脚元にバラの花びらが散る。

西欧のキリスト教世界においては、神の子イエス・キリストの母(つまり「神の母」=テオトコス)であるマリアに関しては、その崇敬の歴史の始まりから、数多くの絵画や彫刻が制作されてきた。なかでも本像の特徴は、新約聖書『ヨハネの黙示録』第12章の記述に基づく、伝統的な「無原罪の御宿り」のマリア図像に近い¹⁰。本像が金メッキによる黄金の壁面を背景とするのも、聖母マリアを神の恩寵に恵まれた存在として「荘厳化」するのと同時に、黙示録の女が、その身体に(光を放つ)「太陽をまとった」(12章1)という記述に対応していると考えられる。

もとより「無原罪の御宿りの聖母」の教義は、聖母マリアの処女性をより尊重する内容で、マリア自身が神に選ばれ、奇蹟的に母アンナから誕生したとする¹¹。マリアもキリストと同様、父なる神の力によって、「原罪」なくして母アンナの体内に懐胎されたとするもので、とりわけ17世紀のスペインで広く受け入れられ、美術でもさかんに図像化された。たとえば、17世紀セビーリヤの代表的彫刻家であるマルティネス・モンタニェースは、数多くの教会に厳かな雰囲気をもたう木彫(彩色)像を提供し[図10]、18世紀にいたって



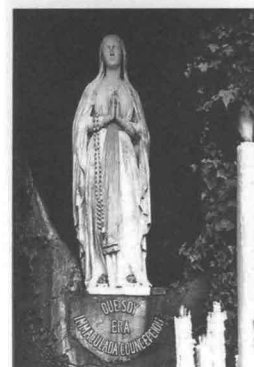
【図9】本像の図像的特徴



【図10】マルティネス・モンタニェース
1628~31年 木彫 彩色 高さ164cm
「無原罪の御宿り」
(スペイン セビーリヤ大聖堂)



【図11】バルトロメ・ムリーヨ
1678年 カンバス 油彩 206×144cm
「エル・エスコリアル無原罪の御宿り」
(マドリッド プラド美術館)



【図12】ジョセフ・ファビッシュ
1864年
「ルルドの聖母」
(フランス ルルドのマサビエル洞窟内)

も王室をはじめ各地で人気を博した画家バルトメ・ムリーヨが、繰り返しこの聖母を、処女性を強調するように清浄可憐な少女として描いている¹²〔図11〕。この教義は、後年の1854年、カトリックのヴァティカン公会議で正式に認められて以降、祝祭日を12月8日として現在まで広く祝われている。

一方で、本像が身につける「腰帯」と「ロザリオ」は、「無原罪のマリア」の図像の中でも、「ルルドの聖母」の図像と共通する特徴である。教義公認直後の1858年、ルルドの村はずれで、少女ベルナデッタの前に聖母マリアが出現する奇蹟が起こった。ベルナデッタが残した伝説的証言で、このときの聖母は、頭から白いヴェールをかぶり、白いローブを着て腰に青い帯を巻き、右手に長く垂れるロザリオを持ち、足は素足だったと伝えられ、自ら「Conceptio Immaculata (=無原罪の御宿り)」と名乗ったという。これがルルドにおける「聖母出現」の奇蹟であり、その聖母を「ルルドの聖母」と呼ぶのである。作品に表された「ルルドの聖母」像は、現地ルルドの洞窟に置かれたファビッシュの彫像をはじめとして〔図12〕、一般的に、伝統的な「無原罪のマリア」の図像によりながら、ベルナデッタの証言に基づく図像的特徴が付加されている¹³。

以上本像の図像的特徴と照合すれば、「ルルドの聖母 ボランティア協会」と同様の標章が刻まれた厨子と併せて、本作が、ルルドに由来し、「ルルドの無原罪の聖母」をかたどったものであると結論づけられるだろう。

エルサレムやローマ、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラをはじめとする、中世以来のキリスト教の他の巡礼地でそうであるように、ルルドでも、当地に出現した「無原罪の聖母」を模した、さまざまなレディメイドの記念品が、洞窟を中心とした聖地周辺の土産物屋で数多く売られてきた〔図



〔図13〕 ルルド巡礼記念品(ガラス製 高さ7.2cm/6.5cm
2007年 安發がルルドにて購入 撮影福島)

13〕。こうした品々は、死を覚悟し、身路上の多大な危険をおかしてまで遂行した、聖なる巡礼成就の証しであり、とくに身に付ける小型の携帯品は、巡礼者の帰路の道行きの安全と無事を祈念する「護符」でもあった。総高3.5cmの厨子に納められた本像も、そうしたルルドの巡礼記念の携帯用「お守り」の一点であったと推察されるのである¹⁴。

5. 日本における「ルルドの無原罪の御宿り」の崇敬

キリスト教カトリックは、1549(天文18)年、スペイン人フランシスコ・ザビエルをはじめとする、イエズス会の宣教師によって日本に伝えられた。伝来初期、16世紀頃のキリスト教遺物としては、イエズス会関係者が持ち込んだ小型のメダルや各種キリスト像、あるいはそれを模して日本国内で制作されたものが残されている。聖母像については、玉座に座して膝上に幼子イエスを抱いた「莊嚴の聖母」の伝統的な作例が残されている。弾圧下の禁制江戸時代では、中国から流入し、子供を抱く座像として表された「慈母観音」像が、幼児イエスを抱く「聖母」子像に見立てられた。これらの慈母観音像が現在「マリア観音」と呼ばれるものである。また、当初から「観音菩薩像を模した聖母」として制作された「マリア観音」像の作例も伝わるが、それらの形状はほぼ観音菩薩像の特徴を示すものであり、持物や胸部、背面などに十字を刻む例が残される〔図14、15〕。これと類似した作として、背面に隠して十字架やキリストの磔刑図を刻んだ地藏菩薩像なども残されている。いずれにしても、それらの多くは、像高10~20cm程度の小像であった¹⁵。

禁制の解かれた「新時代」のキリスト教布教は、主としてカトリックの司祭たちが担っていた。とりわけアジアを中心に活動したパリ外国宣教会(パリ・ミッション)派遣の司祭たちは、「ルルドの聖母」への崇敬を熱心に紹介したと言われる。長崎をはじめ日本各地のカトリック教会にルルドの聖母像をモデルとした像が安置され、マサビエルをかたどった洞窟模型も数多く設置された¹⁶〔図16〕。東北地方でも、パリ・ミッションの司祭たちが住んだ、山形市の山形カトリック(洗礼者ヨハネ)教会(1901=明治34年献堂)や鶴岡市の鶴岡カトリック(ノートル=ダム)教会(1903=明治36年献堂)には、そうした像や洞窟の模型が教会内外に配置され

て、現在でも聖母崇敬の拠り所となっている。山形カトリック教会では石を積み上げて作った「洞窟」のなかに[図17]、鶴岡カトリック教会では石製の台座の上に(かつては洞窟模型のなか)、それぞれ「ルルドの無原罪の御宿り」のマリア像が安置されている¹⁷[図18]。

おわりに

結局、本像については、厨子天蓋に見られる「ルルド」の標章と側面や内部壁面の「百合」の紋章の由来、および図像学的見地から、「ルルドの無原罪の御宿りの聖母」を表現するものであることが判明した。制作地は、必ずしも明快ではないが、レディメイド品としてフランス国内、おそらくは巡礼当地のルルドかその周辺、制作時期は早くともルルドにおいて聖母出現の奇蹟がおこった19世紀後半以降とするのが妥当であると思われる。こうした作品を、当時日本国内でコピーする必要性や必然性はそれほどなかったであろう。

このような由来や年代の推定から、本像の蒲生家との関連およびキリシタンとの関わりも考えにくい。しかし、南西フランスのキリスト教の聖地巡礼記念品と推察される本像が、長年南部家の菩提寺である仏教寺院で尊重され、伝えられた歴史は、盛岡市におけるキリスト教の布教とその浸透という局面で看過できない重要事項であり、厨子ともに本作の市指定有形文化財としての価値は損なわれるものではないとあらためて結論できる。

今後の調査の方向については、本作が、ある程度大量生産された土産物作品の1点と考えられるため、盛岡市や東北地方にとどまらず、日本国内に他に同型の作品が持ち込まれた可能性を探る必要がある。また、こうしたキリスト教関連資料が盛岡市に伝えられ、盛岡藩主南部家代々の菩提寺である聖壽寺に秘匿された経緯については、南部家および聖壽寺と盛岡におけるキリスト教信仰との関連が注目される。聖壽寺周辺所在のキリスト教カトリック教会としては、盛岡市内に四ツ谷教会(本町通2丁目12-25)がある。教会創設は1880(明治13)年で、その後宮古、釜石をはじめとした沿岸地域への布教活動の拠点となった。本教会は、現在の盛岡白百合学園の創立に尽力するなど、盛岡市周辺および岩手県北部の近代キリスト教史において重要な位置を占めた。なかでも2代目司祭ペルリオーズは、



〔図15〕マリア観音像
(個人蔵 木彫 高さ25cm)

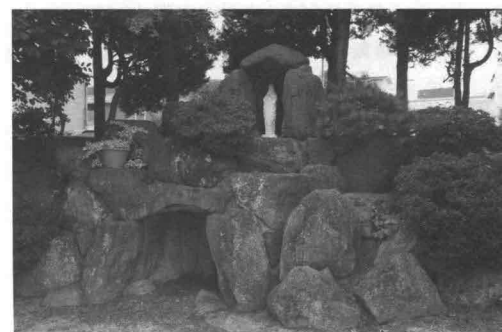
〔図14〕白磁造聖母観音菩薩像
(高さ10cm)



〔図16〕長崎市本河内
聖母の騎士修道院の「ルルド」
(2014年 撮影安發)



〔図18〕鶴岡カトリック教会
ルルドの無原罪の御宿り像
(聖堂主扉口前 2014年 撮影安發)



〔図17〕山形カトリック教会の「ルルド」=洞窟とルルドの無
原罪の御宿り像(聖堂裏 2014年 撮影福島)

1880~1883(明治13~16)年の盛岡在任中に聖壽寺所蔵の『南蛮屏風』の写真を撮影したのに加え、他にも住職との交流を示す記録が残されている¹⁸。こうしてみると、本像は、盛岡を訪れた司祭や神父あるいは信徒によってこの地にもたらされた可能性が考えられるのである¹⁹。

謝辞

今回の調査にあたっては、大光院聖壽寺の各位、もりおか歴史文化館学芸員野中昭美氏、盛岡市教育委員会歴史文化課各位にご協力・ご教示いただきました。山形カトリック教会、鶴岡カトリック教会の関係各位にもご支援をいただきました。深く感謝申し上げます。

註

1. これまでの調査では、青銅製とされてきた(盛岡市教育委員会歴史文化課『もりおかの文化財』盛岡市教育委員会 2007 p.33=岩手日報社出版部『いわて未来への遺産 盛岡藩の歴史と至宝』岩手日報社 1998初出)。本調査の目視観察では、銀製と思われた。蛍光X線解析等の科学的調査が必要である。
2. 前掲『もりおかの文化財』p.33
3. 本寺の沿革等については、大光山聖壽寺『大光山聖壽萬年禪寺縁起—南部家菩提所』光陽美術 2014 pp.8~9
4. 前掲『もりおかの文化財』p.33他。於武の方は、伝説的別称「ムカデ姫」として広く知られる。その南部家興入れの自参品のなかには、先祖藤原秀郷が大ムカデ退治に用いたとされる「矢じり」があった。死後、その遺体にムカデの這ったような跡が浮き出し、同時に墓地から大小無数のムカデが這い出てきたのが、大ムカデの祟りと信じられた。キリスト教の受洗者であったかは不明。
5. 森護『紋章学辞典』大修館書店 1998 p.132
6. 大貫隆・名取四郎・宮本久雄『岩波キリスト教辞典』岩波書店 2002 p.1145=「聖母マリアの花である。白い色は純潔を表し、雅歌の花嫁はしばしば百合にたとえられる。それゆえ百合はマリアの処女性や無原罪の宿りを象徴して受胎告知や聖母のエリザベト訪問、聖母被昇天などの場面に描かれる。」柳宗玄・中森義宗『キリスト教美術図典』吉川弘文館 1990 p.384=「その純白な花は清浄無垢の象徴で、処女聖人たち、とくに聖母の持物」「天の元后としての聖母に用いられる。」等を参照。
7. この刻印については、浅野ひとみ氏(長崎純心大学)よりご教示をいただいた。
8. 図版は「ルルドの聖母ボランテア協会」公式HPから引用した。
9. ルルドに出現した聖母は、少女ベルナベッタに「マサビエルの洞窟」の地面を掘るように促し、そこから泉が湧き出した。それが「ルルドの泉」で、治癒、回復の奇跡的力を有するとされてきている。ルネ・ローランタン(五十嵐茂訳)『ベルナデッタ』ドン・ボスコ社 2004『Rene Laurentin, Vie de Bernadette, Paris, 1979』。菊地章太『奇蹟の泉へ 南ヨーロッパの聖地をめざして』サンパウロ 2006。エリザベート・クラヴリ(遠藤ゆかり訳)『ルルドの奇蹟 聖母の出現と病気の治癒』創元社 2010『Elisabeth Claverie, Le Monde de Lourdes, Paris, 2008』他を参照。
10. 『黙示録』第12章1~「また、天におおきな星が現れた。ひとりの女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。…。」前掲『岩波キリスト教辞典』p.1096「マリアは白衣と青いマントを着て両手を胸に置いたり合掌したり、『黙示録の女』に基づき三日月を踏み12の星の冠をいただき光につつまれた少女として描かれ、ムリーリョの作品をはじめ17世紀スペインで特に好まれた。」等。
11. 前掲『岩波キリスト教辞典』pp.1095~1096「ラテン語conceptio immaculata…マリア自身が原罪の汚れを免れて、母アンナにより懐胎されたという理念」
12. 雪山行二「スルバラン、ムリーリョとセビーリャ派」=『世界美術大全集 バロック1』小学館 1994 pp.281~302。木下亮「スペインのバロック彫刻」=同書pp.333~340(同書p.=本論図9)。『プラド美術館展~スペインの誇り 巨匠たちの殿堂~』カタログp.=本論図10。このタイプの図像は15世紀にはじまるとされる(ゲルト・ヘインツ=モーア(野村太郎、小林頼子監訳)『西洋シンボル事典—キリスト教美術の記号とイメージ—』八坂書房 2003 pp.285~285)『Gerd Heinz-Mohr, Lexikon der Symbole—Bilder und Zeichen der Christlichen Kunst, München, 1971』。17世紀スペインでは、セビーリャの画家フランシスコ・パチューコが、『絵画論』(1649年刊行)のなかで「無原罪の御宿り」のマリア像に関する図像内容を規定している。それによれば無原罪の聖母マリアは「腕に幼児イエスを抱えず、両手を胸前で組み、太陽に近く、星を冠して、また、足下には月を踏まえ、聖フランシスコの紐帯を巡らし、12~13歳の香ぐわしき、いとも麗しき、澄んで大きな眼、壁無き鼻と口、バラ色の頬、黄金に広がる美しい髪をも」つ、とされている。(浅野ひとみ訳=『スペイン・ラテンアメリカ美術史研究』スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会1=2000 pp.35~36)。
13. 「ルルドの無原罪の聖母」像は、17世紀以来の「無原罪の御宿りの聖母」の図像に基づきながら、青いマントの代わりに「白いヴェールと青い腰帯」を身につけ、「ロザリオ」を持ち、足下には「黄色いバラ」が配される(クラヴリ前掲pp.45~46 他)。
14. ルルドの巡礼記念土産品は、当地の聖泉水をいただく容器が主である。本作は、厨子の後ろ半分の空洞に、聖泉水に浸した「布」(あるいは他の何か)が納められていたと推測される。
15. 「マリア観音」とは、マリア像の所持を禁じられたキリシタンが、仏教の「観音」像をマリア像に見立て、崇敬の対象としたものである。そもそもは外来の作で、中国製の白磁作品が多い。「マリア観音」については、とくに高田茂『聖母マリア観音~御姿と伝承』立教出版会 1972(同書図10=本論図13)および三田元鐘『切支丹伝承』宝文館出版 1975(図=本論図14)を参照。
16. 村上光雄『やすらぎのキリスト教会3』里文出版 2006 p.106=「(長崎県福江島の井持浦教会 1895(明治28)年献堂)(その)境内にあるルルドは、五島全域の信徒が、島内の奇岩・珍岩を持ち寄って1899(明治32)年に建設した日本最初のルルドで(ある)。」ここで言われる「ルルド」とは、ルルドの無原罪の聖母像を納めたマサビエの洞窟の再現模型をさす。長崎カトリック大司教監修『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』p.113参照。また長崎市内(本河内)の聖母の騎士修道院は、裏手の彦山

の山中に洞窟をかたどり、出現した「無原罪の聖母」像とそれに
祈る少女ベルナデッタ像を配した大型の「ルルド」(1933(昭和
8)年以来)を伝えている。=本論図16

17. 鶴岡カトリック教会の「ルルド」については、萩原泉『天主堂を仰
ぎ見て』鶴岡カトリック教会 1996を参照=p.168「鶴岡カトリック
教会のルルドの洞窟は、聖母マリアの出現を記念すると同時に、
聖母マリアのご保護を祈り、天主堂献堂70周年記念事業の一
環として、昭和47年8月20日に完成し、新潟教区長の祝別を受
けた…。」2014年現在では「洞窟」は取り除かれ、ルルドの無原
罪の聖母像のみが、前庭の聖堂入口に向かい合う位置に配さ
れている。
18. 上田哲・ホーレンシュタイン『岩手福音宣教百年史』岩手カトリ
ック宣教再開百年祭実行委員会 1974 pp.357～358。盛岡市
白百合学園『一粒の麦地に落ちて 盛岡白百合学園創立百
周年記念誌』盛岡市白百合学園 1992 pp.42～47。
19. アメリカ留学経験を持つ南部英麿や遠野南部家の南部義敦、
欧州外遊の経験ある南部利淳など、幕末以降に渡欧経験のあ
る南部家ゆかりの人物の手によって持ち込まれた可能性も考慮
する必要があると思われる。また別に、前掲『岩手福音宣教百
年史』(p.44)には、盛岡カトリック教会に残された受洗者の名簿
の中に、1876(明治9)年5月21日、ラングレ神父による受洗者と
して「南部アキカタ(18歳)」の名前があることが報告されている
のも見過ごせない。

[執筆者]

安發 和彰

Kazuaki AWA

大学院芸術文化専攻

Department of Art History and Conservation, School of Art
准教授

Associate Professor

福島 茜

Akane FUKUSHIMA

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

Ukitamu Fudoki no Oka Archaeological Museum

学芸員

Curator